目黒区納税貯蓄組合連合会優秀賞

限りなく、どこまでも広がる税

桜修館中等教育学校　三年

杉山　天悟

私は小学生の頃、父の仕事の都合でカタールという国に約四年滞在していた。カタールは、日本からは約八千キロメートル、フライトで十時間強というとても遠い砂漠の国だ。それなのにも関わらず私たちは、日本の何かにに支えられながら、何不自由なく、生活することができていた。幼かった当時でも、日本の何か大きな影に支えられていることが分かったほどだ。

カタールでの滞在では、日本ではできないような様々な貴重な体験をすることができた。当時通っていたドーハ日本人学校では、日本から遥々送られてきた理科の実験機材や、算数の道具、国語の教科書や本など、しっかりとした教材で多くの事を学ぶことができた。もちろん校舎もしっかりとしていて、さらにはスクールバスまであった。授業では、英語の他にアラビア語もあり、現地のインターナショナルスクールなどとの交流も多くあったため、グローバルな視点を持てたり、英語を使いならし、海外でもコミュニケーションを容易にとることができるようになったりする事ができた。また、現地に滞在する日本人が集まる、日本人会というイベントもあった。日本人会では主に日本人と話すことが多かったが、異なる文化や国の歴史について話したり、とても優秀な人や珍しい仕事をされている人と出会い、人脈を広げたりすることができ、将来の視野を広げることにつながった。

その後日本へ帰国し、そのような環境が成り立っていた背景には、日本の税金による支援があったのだと私は調べて知った。今まで感じていた日本からの支えは、日本の税だったのだということに驚かされ、深く感動した。文部科学省や外務省、海外子女教育振興財団をはじめとする日本の機関が、日本人学校や海外での日本人のイベントなどの設立、運営、輸送、拡充に必要な資金を税収を原資として、補助してくれていたのだ。さらには、教材の無償配布、教育の派遣、施設整備の補助なども、その一部として挙げられる。散々人の生活を苦しめると言われてきた税が、何千キロも遠くの私たち日本人の生活と人生を豊かにしてくれ、生活に欠かせないつなぎめとしてはたらいてくれていたことへの感謝は、あまりに大きく、言葉にできない。もしそれらが自己負担だったなら、学びや国際経験は限られたものとなっていたかもしれない。また、私自身の将来への希望や成長も、ある程度さえぎられてしまっていたかもしれない。税金は国内に限らず国外に住む日本人や次世代を支える公共資源なのだと深く実感した。

私はこれらの経験を通じて、税金は私たち日本人が安心して学び、生活し、時には世界とつながる力をつけるために後押ししてくれる存在だと学んだ。将来私も、大人として納税する立場になったとき、人々の暮らしの基盤を支え、成立を後押しできるような、誇りを持った存在でありたいと思う